

活動報告書

報告者氏名：赤嶺太亮 所属：沖縄県立那覇みらい支援学校 記録日：2022年2月27日
キーワード：コミュニケーション

【対象児の情報】

○障害名：知的障がい 自閉症スペクトラム

○障害と困難の内容

発語は「アー」のみであるが、内言語が豊富で「いつ、どこで、だれと、なにをした、そのときの気持ち」など教師がシンボルを提示すると選択して伝えることができる。しかし、友達と遊びたそうに困った顔で友達のそばに来てオドオドと（友達に触れる、「アー」と呼ぶなどの直接的な注意喚起は見られない）しながらずっと立ち、友達が気づいてくれないと残念そうな表情で諦めたり、泣き出したりすることがある。ナイーブで大人しい性格もあって、関わりは常に受け身的である。

【活動目的】

○当初のねらい

A児は「障害があるから伝えられない」のではなく「障害があるにも関わらず“言葉でしか話す環境が与えられなかったから”伝えられない」のである。実践では、タブレット端末をツールとしたコミュニケーション支援で環境を整えることで言語表出を補い、A児の「伝わった」「楽しい」「もっと伝えたい」という気持ちを高めること、伝えられる事柄を引き出すことができると考えた。

○実施期間：令和4年7月～令和5年1月

○実施者：赤嶺太亮

○実施者と対象児の関係：自立活動専科として関る

【活動内容と対象児（群）の変化】

○対象児（群）の事前の状況

・真面目で頑張り屋で、係活動など毎日確実にやり遂げようとしていたり、先生にお願いされたことは手を抜かずに一生懸命に取り組んだりする。

・発語は「アー」のみであるが、内言語が豊富で「いつ、どこで、だれと、なにをした、そのときの気持ち」など教師がシンボルを提示すると選択して伝えることができる。

・非常に大人しく慎重な性格をしている。教師やどの友達に対しても優しく、突発的に怒ったり癩癩を起こすことはない。一方で、長袖の洋服を着ているときに「暑そうだね？着替えたらいよいよ」という教師の言葉かけに泣き出すことがあるなど、非常に気が小さくて傷つきやすい。非常に怖がり、関わりが少ない先生が近づく、乱暴な友達が近づく、目を伏せ怯えたり泣き出しそうな顔になったりする。

・ナイーブで大人しい性格もあって、関わりは常に受け身的である。例えば、友達と遊びたそうに困った顔で友達のそばに来てオドオドと（友達に触れる、「アー」と呼ぶなどの直接的な注意喚起は見られない）しながらずっと立ち、友達が気づいてくれないと残念そうな表情で諦めたり、泣き出したりすることがある。教師との関わりも同様で、トイレに行きたいときなどに教師が気づくまでずっとオドオドとしながら困った顔で教師の後ろに立ち、教師が気づかないと泣き出すことがある。この行動は学校だけでなく放課後等デイサービスや家庭でもほぼ毎日起こっている。

○活動の具体的内容

・実態把握

ここでは、効率的に日々の行動観察の記録をとるために、iPad を常時携帯、及び定点カメラとして設置し

た。iPad による行動観察は、ビデオ撮影の際に「手軽に持ち運びができる」、分析の際にも「シームレスにデータをやりとりできる」という点で非常に有効であった。介入前（6月）の10日間、登校(8:30)から下校(14:15/15:15)の間にA児の行動観察から要求等（発声、指差しや身振り）の発生回数をまとめた(図1)。その結果、1日に3～7回の頻度で発生していることを確認した。

日々の生活の中で友だちや教員、家族などの名前、学校内外の場所の名称、本人がしたいことなどについて、個別学習の中で教師の「〇〇はどれ？」という指示に従ってA児にイラストを指さしてもらった。その結果、50語の理解があることがわかった(図2)。これにより、「本人の言語の理解度」に比べ、表出手段の少なさというのが明確になった。

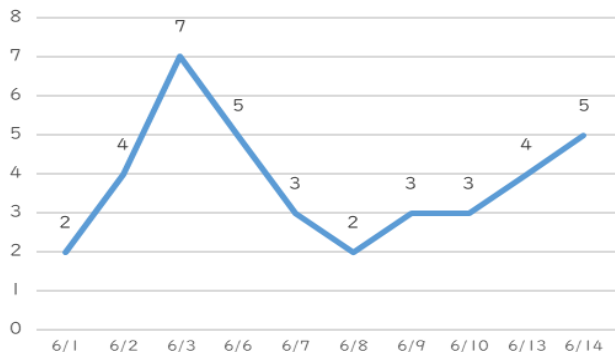


図1 要求行動の発生回数

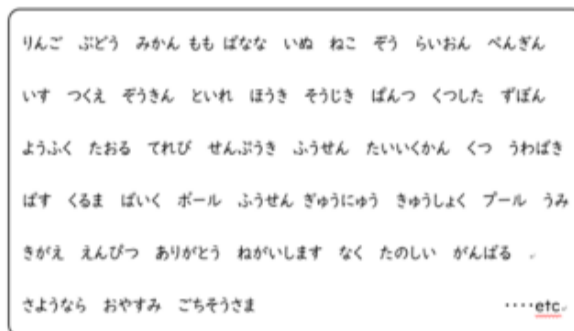


図2 理解する語彙の

・ A児の「伝えることができた」とい自信を高める（7、9月）

A児は、助けて欲しいときや要求の際に、身振りや手振りも少なく上手く伝えられずどうしていいのか困る、関わりを諦めるということが頻繁にあった。そこで、アプリ「DropTap」を活用した。「DropTap」は、デバイス上に表示されたシンボルをタップすると、そのシンボルの持つ意味をアプリに登録された音声や録音した教師の音声で読み上げることができるなど、話し言葉でのコミュニケーションを苦手とする自閉症や言語障害のある人のコミュニケーションを助けるアプリである。このアプリを使って「A児が何かを伝えようとするが上手く伝えられない場面を探る→その要求に合ったシンボルを作成する→シンボルの使い方を教える→A児が「DropTap」のシンボルを使って要求をする→“〇〇がやりたいんだね”など言葉で的確にフィードバックし、伝えられたことを称賛する」といった一連のやりとりを繰り返した。このやりとりから「伝わった」という成功体験を重ね、さらにA児の「伝えたい」という気持ちを高めることをねらいとした。まずは、A児の好きなおもちゃのシンボルを入れ、タップすると「〇〇が欲しいです」という音声を読み上げられるように設定した(図3)。また、iPadは登校後から下校後まで常にA児の机の上に置く、またはA児が携帯できるようにした。iPadは教師が準備するものではなく、A児自身に「iPadは自分の物で、自分の気持ちを伝えるツールとして使えるもの」を実感して欲しかったからである。



図3 DropTapのボードの一例

・シンボルの内容を拡げる（10月～1月）

表出できる内容をさらに拡げるために、自由に話したいことを伝えられることを目指した。友達や教師の名前、場所はもちろん本人が話したいトピックや、その時の学習にかかわるものも含めるようにした（図4、5）。



図4 聴きたい音楽のリクエスト



図5 気持ちのボード

・成功体験を可視化する（9月～1月）

A児が「DropTap」を使って要求を伝えることができた場面を動画で撮影し、A児自身に提示することにした。A児は、動画に写る自分がすぐに関わり、毎回集中して動画を見ていた。動画の中で要求が伝わった際には、教師の目を見て笑い伝わった喜びを表現していた。視覚的な情報が理解しやすい自閉症児にとって成功体験を動画で客観的に振り返えたりすることは、「伝わった」「先生が応えてくれた」という気持ちをさらに高めるきっかけとして非常に有効であった。

○対象児（群）の事後の変化

導入後、A児にとってすぐに「DropTap」でのやりとりは欠かせないものとなった。「DropTap」の使い方を覚えると休み時間に頻繁にシンボルをタップして「おもちゃが欲しいです」と要求することができるようになった。好きなおもちゃのシンボルも数種類に増やすごとに、その都度遊びたいおもちゃを自分で選んで伝えることができるようになった。教師が察して「おもちゃが欲しいの？」と言葉をかけてもらったり選んでもらったりしていたA児にとって、「DropTap」でのやりとりは「自分で伝えることができた」「自分で好きなおもちゃを選ぶことができた」という大きな成功体験となった。教師に伝わった際には、毎回嬉しそうに笑う姿が見られた。

また、伝える内容も拡がりが見られた。プリントを終えたあとどうしていいかわからず困っていたA児がシンボルをタップして「〇つけをお願いします」と伝えたり、給食時間に食べたくない食材があっても困った表情でじっとしていたA児が教師のシンボルをタップして「〇〇先生」と呼んで手を合わせる（ごちそうさまの合図）など、少しずつ様々な場面で気持ちを伝えることができるようになった（図6）。



図6 ごちそうさまを伝える様子

9月以降、A児は様々な姿を見せるようになった。教師が新しいシンボルを作る様子を見てA児も自分でシンボルを作ることができるようになった。自分で作ったシンボルをタップして欲しいようで、「〇〇先生」と言って「DropTap」をタップする仕草（先生にタップしてほしい）でアピールし、iPadから流れる音声に驚く教師の反応を見てA児は嬉しそうに笑う様子が見られるようになった。とりわけ友達との関わりは大き

く増加した。自分の遊ぶ様子や友達の様子を動画で撮影して、その動画を友達と一緒に見て喜んだり、「おいで～」と言って友達を遊びみ誘ったりと、iPad を介して教師や友達と積極的に関わる姿が見られるようになった。

【報告者の気づきとエビデンス】

○主観的気づき

本実践では、言語表出の苦手な自閉症児に対してタブレット端末をツールとしたコミュニケーション支援で環境を整えることで言語表出を補い、A児の「伝わった」「楽しい」「もっと伝えたい」という気持ちを高めることをねらいとした。その結果、A児の発声、指差しや身振りなどの要求は大きく増加した。タブレット端末をツールとしたコミュニケーション支援は、A児にとって「伝わった」という喜びを感じるものであり、その気持ちが新たな言語表出の獲得、身振りや手振りの増加を支えたのだと考える。

○要求の発生回数の増加

図7は、介入後（1月）の10日間、登校(8:30)から下校(14:15/15:15)の間にA児の行動観察から要求等（指差しや身振り）の発生回数をまとめ、介入前（4・5月）と比較したものである。その結果、介入前に比べて要求等（発声、指差しや身振り）の発生回数が増えていることが分かった。

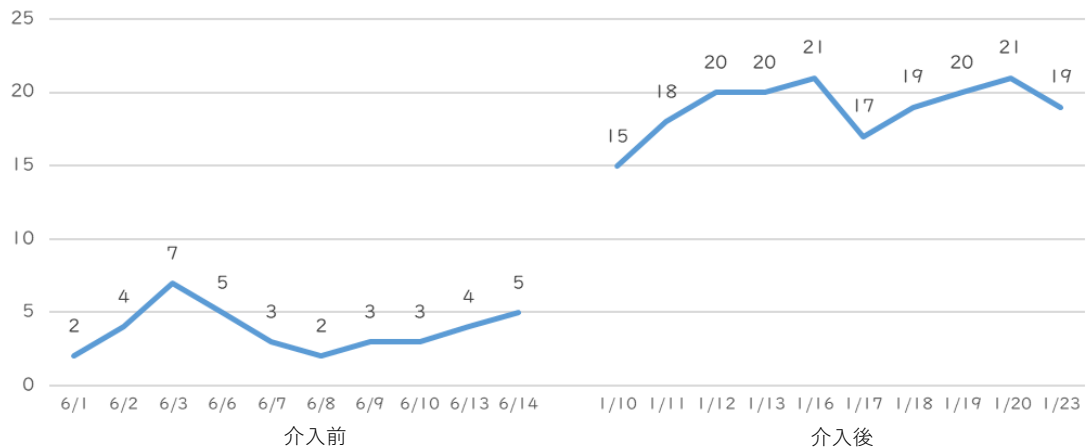


図7 介入前後の要求回数の比較